

〈詩〉入選

ウイル・オ・ウィスプ

外国語学部 英語英文学科 3年 藤間渚

幽霊がいる。

あばら骨で守られた臓器の奥に ひっそりと削られたクレーター
ずっと昔から そこに幽霊がいるんだ。

クライン。クライン。

埃まみれの天井の下で 彼らはいつまでも泣いている

太陽のいない 都会の片隅

百年続いた 亡霊の嘆きを

叫べ、叫べ。

溜まった内圧で 破裂する前に

スピッター。スピッター。

大気に漂う彼らの遺物まで 肺が吸い込んでむせ返る

コンクリート建て 墓標の内側で

呑み込んだ言葉が 器官を狭めた

吐き出せ、吐き出せ。

隠してばかりじゃ 窒息してしまう

エスケープ。エスケープ。

いつか隠したどこかの孔から 熱い液体が漏れ出した

ようやく脈打つ 心臓の軋みで

過去の亡霊に ラッパの音色を

逃げ出せ、逃げ出せ。

まだ僕たちは 生きているのだから

まだ僕たちも、ここにいるのだから。

● 制作者より

街を歩いていると、よく死んだような顔をして歩く人たちを目にします。空虚な瞳で、ふらふらと弱った足取りで歩く人たち。その様子は、まるで「悪霊に取りつかれた」かのようです。

また、夜の道を一人で歩いていると、急に寂しくなる時があります。胸のあたりにあるはずの何か欠けて落ちてしまった感覚がして、ただ何も無い空間が、あるいは目には見えないガスが広がっている感じが。そんなときに、僕は「幽霊」を連想してしまいます。本当は、誰しもが飼っているのではないのでしょうか。この、自分のどこから生まれてきた冷たい存在を。